高齢者介護施設の音楽プログラムはなぜこんなに画一的なのだろうか？

名古屋市熱田区
医療法人杏園会　デイサービスセンターろくばん
管理者　森本　恭一

はじめに

一般的に介護施設で唄われている音楽といえば、童謡・懐メロ等のジャンルを思い浮かべるのではないだろうか。たしかにこれらのジャンルは多くの人達が予備知識なしで唄う事ができる優秀な楽曲が多い。しかし、介護保険も実施されてから１２年経過し、利用する世代も幅広くなり（40 代～90 代）今までの童謡・懐メロだけで対応することは困難になりつつあるように思われる。
“高齢者には童謡や懐メロだろう”との決め付けが一般的に介護業界では浸透しているが本当にそうであろうか？プレスリーが生きていれば 79 歳、ジョンレノンが生きていれば 74 歳、最近来日したポールマッカートニーも 72 歳である。このような事実から、当施設を利用している方達の中にもビートルズ世代が多数存在すると考えることもできるだろう。
70 歳代の高齢者？にとっては、ロックミュージックでさえ身近な音楽として存在していたのである。

上記の点を踏まえ、**デイサービスろくばん**でも新しい音楽プログラムのありかたを模索し、実践してみた。

◆ 選曲について

選曲については古いものから新しいもの更にオリジナルソングまで幅広くラインナップした。
（例）
童謡：かごめかごめ　ひらいたひらいた　とおりゃんせ　はないちもんめ　アルプス一万尺等
民謡：ソーラン節　一週間等
演歌：与作　津軽海峡冬景色等
ポピュラー：**ハイロウズ**（日曜日よりの使者）、**忌野清志郎**（デイドリームビリーバー）、**きゃりーぱみゅぱみゅ**（キャンディキャンディ）、**くるり**（言葉は三角心は四角）等
アニメ・CMソング・オリジナルソング

◆ 実践方法

音楽プログラムを実施にあたり、高齢者に新しいことを挑戦してもらうのであれば、スタッフも新しいことに挑戦する必要があるとの意見から、カラオケではなく楽器演奏を修得し、生伴奏でプログラムを遂行することになった。
実施頻度：　毎日 20 分
全員参加：　合唱
使用楽器：　ギター、ウクレレ、カホン、ボンゴ、ピアノ、ＤＪセット等

◆　実践してみて

最初のうちは初めて唄う**“うた”**に戸惑い不満を口にする人達も居たが、練習を重ねるうちに歌詞カードを見なくても唄えるようになった。そしてその楽曲の持つメッセージ等にも気付き始める人も出現するようになった。

また童謡・懐メロ等も新しいアレンジを加えることにより合唱しやすい楽曲に変化していった。

スタッフが演奏することにより、その日のその日の状況に対応でき、カラオケでは味わえない臨場感等も醸し出すことができるため、よりいっそう合唱隊の一体感・高揚感を高めることに繋がっている。

歌詞カードを持ち帰り自宅で練習する人も多く、それによる効果として家族との会話が増えたとの意見もきかれるようになった。

＊　90歳の男性が“はじめてのチュー”（キテレツ大百科エンディングソング）を気に入り毎日練習していたため、録音テープが擦り切れたとの報告が家族からあった。

＊　唄っている楽曲がＣＭで流れていた・紅白歌合戦で聴いた等の反応も多い。

＊　年に2回、家族会を開催（50名以上の参加あり）、合唱を発表する場を設けているが家族の方達からみても“斬新でとても面白い”“年寄り扱いしてないところがよい”等、好意的な意見が多数を占めた。

◆　実際の映像

＊動画参照

◆　問題点

最大の問題点はスタッフが演奏及び指揮をするため、演奏技量・コミュニケーション能力等が音楽プログラムの出来の良し悪しに直結してしまうことである。

そのため日によって（演奏スタッフによって）一体感や高揚感に大きな差が生じてしまう。

今後は、いかにスタッフの能力差を高いレベルで均一にしていくかが大きな課題である。

◆　まとめ

新しい音楽プログラムを通して、高齢者は決して過去を生きている存在ではなく**“今を生きている存在”**であるということを再確認することができた。歳を重ね、肉体が衰えていくことを止めることは誰にもできないが、精神の衰えは気持ち次第でどのようにでも保つことが可能である。高齢者といっても70歳と90歳では生まれ育った環境も全く異なるため、画一的な考え方で捉えること自体に無理があり本来であれば、世代別的な視点でのプログラム作りが必要であると思われるが、介護サービスの現場における慢性的なマンパワー不足からするとそれもままならないことが現実でもある。

そのような現状を打破するためには何か新しいアイデアが必要であり、私たちが導き出した結論は新しい価値観をすべての世代と共有するというものであった。**“たかが音楽”**ではあるかもしれないが音楽の持つパワーは確実に世代を超えて人の心に響くようである。聴いたことのない楽曲に感動し、詞の内容に涙し、共感し、皆で盛り上がる高齢者を見ることでスタッフの高齢者に対する画一的な見方も大きく変化してきている。

◆　さいごに

まだまだ介護業界は画一的で新しいことに対するアレルギー反応は強いといえるだろう。

しかし、高齢者といわれる世代もどんどん移り変わっていき、私たちもいつかは高齢者になるのである。

高齢者になったとき自分がどんなサービスを提供されたいか考えてみることも必要なのかもしれない。